

東町健太
エッセイ集！
『バカが吼える！』



東町健太

「バカが吠える！！」

「テレビばかり見ているとバカになる」なんてのは昔からわりと多くの人が言っている言葉であって、下手をするとテレビ番組にコメンテーターとして出演しつつそんな発言をする「知識人」なる方までおられる。子供のころからテレビばかり見て育った自分は今現在、自他ともに認めるバカとして障害者たちとともに単純作業に従事して糊口をしのいでいる現実から見ると、彼らの指摘もあながち間違いじゃないような気がしないこともない。

ただバカはバカなりに世の中の流れというか、いま社会で何が起きているのかなどの情報くらい知りたいという身分不相応な願望も持ち合わせているわけで、そういった願望を満たすためにまたテレビにかじりついてよりいっそう念の入ったバカに進化しつつあるのだけど、世の中を知るには別にテレビに限らなくても他のいろんなツールがある。

ひとつには現代社会を生きる必須アイテムであるインターネットが挙げられると思う。しかしそれにはひとつ欠点があって、それは手に入る情報量があまりにも膨大である、という点だ。そもそも情報処理能力があまりに欠如しているからバカなわけであって、バカがネットでどんな膨大な情報を得たとしてもバカにそんな大量の情報を処理できるわけなどないのだからそれは何も情報を得ていないのに等しい、というか生半可な知識や自分でもほとんど咀嚼しきれない知識を周りに自慢気に話してニヤニヤする、誤った情報をもとに不可思議かつ不気味な行動をとるなどして、人をイライラさせるバカも発生したりする。バカにネットは扱いきれない。

テレビもダメ、ネットもダメ、となるとどうすればいいのか？バカは世の中の流れから取り残され続けなければならないのか、というとそうでもない。先に述べたように世の中を知るためのツールなど腐るほどある。

一人のバカとして現代を生きている僕が愛用するのは「雑誌」だ。新聞でもいいんだけど、新聞を「たけえよ」という理由だけでとっていない底辺をさまよう我が家にとってそれは現実的じゃない。その点雑誌なら全て立ち読みで済ますことができるし、ゴミもでることはない。エコ、マジでエコ。

雑誌と一口にいてもやたら種類があるしどれを読むのかが問題なわけだけど、難しく考えることはない。適当に選べばいい。いろいろ読んでいくうちに自分が読んでいて「うわ、おもしろっ」と思えるものにめぐり合う。それをずっと読んでいけば自然と世の中の流れだの情報だのが頭に叩きこまれるはず。

自分が最近愛読しているのは「女性自身」「週間女性」といったいわゆる女性誌とよばれるものだ。こんなものを読んでいるとそれこそ脳が腐るんじゃないか、と思わないこともなくはないけれどおもしろいんだからしょうがない。これらを読むことによって芸能人のゴシップ、今人気の韓流スターの素晴らしさ、更年期障害の乗り越え方、ご利益がやばいパワースポットについての貴重な情報を得ることができている。女性誌とはいっても作っているのは中年のハゲ散らかしたオヤジたちであり、「読んでんのなんかどうせ頭悪いおぼさんだろ？ああん？」といった作り手の声が聞こえるような知性の欠片もないほぼ女性蔑視としか思えない誌面作りがなされている点も大好きだ。

そんな女性誌のなかで僕がとりわけ好きなのが皇室ネタの記事。歴史ある天皇家を記事にしていうのにあたかも親戚の家の人間関係を書いているかのような軽い筆致で書くあの感性。戦時中なら殺されてもおかしくないレベルの不敬さがたまらない。それも皇室が庶民に近くなっただけでそれがいいか悪いかはわからないけど、時代の流れなんですかね。秋篠宮様のところに男の子が生まれたからうやむやになったけど、皇室典範の改正でもめたときもまるでその辺の農家の跡取り問題のテンションで記事作ってるから「これ大丈夫か？」とドキドキしたのはいい思い出。ただそのころ愛子様が小さかったからわからなかったけど、あの子どもどうみてもちよっとアレっていうか、健常者っぽくないというか、まあはっきり言うとどっからどう見ても池沼としか思えないわけで…。いじめ問題とかあったけど、そりゃあ小学生のガキのクラスに一人あんなの放り込まれたら当然いじめられるだろう、と。ちなみに僕の知り合いは愛子様を「あの子絶対アスペだよ」と断言していたけれど、あの子が天皇になる姿はちょっと見てみたかった。各国首脳を招いて「あう、あう、あうああっ！」とかいってパニックおこしてほしかった。この日本という国はもうすぐバカすぎて滅びる。そんな国の「象徴」としてはまさにぴったりだと思いませんか？

(初出 『月刊 オパーリン王国 2011年11月号』)

「クリスマスラブ」

寒さも厳しくなり、2011年も終わりにさしかかろうとしている今日この頃、街は華やかなクリスマスのイルミネーションに華やかに彩られている。つい数ヶ月前までは節電だのエコだのと騒ぎ、普通に冷房を効かそうものなら非国民のような目で見られたのが今となっては嘘のようだ。それでも健気に暖房の設定温度を下げる、不要な電気を消す、などのたゆまぬ努力、我慢をなさっている方もおられるだろう。しかしそういう方々よりも暖房をがんがんに効かし、部屋や家の周囲を不要な灯りでまばゆいばかりにピカピカさせてゲラゲラ笑いながら生活している人たちのほうがどう見ても楽しそうであり、「節電？しらねえよ。」と思うようになるのも無理はないと思うし、明るく楽しく日々を過ごしたほうがいいに決まっている。節電とかめんどくさいし、もういいんじゃない？と誰もがおもっているんだらう。いくらそう口にしなくてもやっつてることはみんなもうすでにピカピカだし。でも一応「頑張ろうニッポン」とか「絆」とか言っちゃうのが今風でいい感じなんだと思う。

さて、そんなクリスマスシーズンな時期であるわけだけれど、クリスマスといえば街がカップルであふれかえる時期である。新宿なんかだとそんなカップルたちに大音量で「イエスを信じないと地獄におちます！」的な辛気くさすぎることをかなりたててる香ばしい団体とかもいるわけだけれど、街がこれだけ華やかな感じだとそりゃあ恋人たちも仲良くなるに決まっている。クリスマスは一年でもっとも恋が発展する時期だといっても過言ではないと思う。いいことだと思う。

しかしよく考えてみたらそんなに順調なことばかりでもない。物事にはなんでも表裏つてものがあるんだよ、というのは誰も知っていることだと思う。たくさんの恋が発展するこの時期というのは裏を見ても一年でもっともHIV感染者が増える時期でもあるといえる。

「あのさあ、花子。そういえばちょっと聞いてもらいたいことあんだけど。」「なあに、太郎？」「俺さあ、ぶっちゃけエイズなんだよね(笑)」「はっ??」

こんな会話が数ヶ月後には日本全国いたるところでかわされることになるのだ。この恋人たちの行く末は考えたくもない。

ちなみに真面目な話、エイズ感染の拡がりを防ぐために無料エイズ検診などを行っている自治体もすくなくない。いい活動だと思う。頑張っしてほしいと思う。しかしこの検診、たいてい平日の昼間におこなっており、普通に勤めている会社員の方々は検診を受けることができない。じやあっていって夜間でもやっつてる街の性病科とかいくと結構いい値段がとられたりする。性病検査には保険きかないからね。かかっているかどうかわからない病気にそんな金をはらうヤツはそうはいない。エイズ感染拡大をふせぐんだ！とか国は言うけどやっつてることを見たら「貧乏人と会社員がエイズ検査なんてうけてんじやねえよバカが」って本音では思っているようにしか見えない。それでも無理に会社員が平日の無料検診にでかけるとしたらどうなるだろうか？

「山田君、明日の会議の件なんだけど」「あっ俺明日有給で休みなんっすよ」「あ、そうなの？なんか用事でもあるの？」「明日はエイズと梅毒と淋病の検査にいきますが何か？」「あ…そ、そう…わかった」

これでは彼の今後の会社生活が危ぶまれる。上司もリアクションとれないだろう。

ただ、HIV感染者数は確実にふえてきているとはいえ、現代医学の進歩でHIVに感染してもエイズ発症をかなりおくらせることはできるようになってきているらしい。だから今でこそHIV患者はそれをひたかくしにしているが今後、HIV患者であることを普通に公表し、普通に社会で生活するようになる人も出てくるのではないだろうか。社会の中でHIVが普通にあることのようになる世の中になるのだ。そういった社会の変化にもっとも影響を受けやすいのが子供たちである。昭和年代のアニメで子供たちの囃し言葉として「お前のかーちゃん、でーべーそーっ！」というのがあったが、これからのアニメでは「お前のかーちゃん、えーいーずーっ！」というのがでてくるかもしれない。

クリスマス。この時期になるともう一年も終わり。今年もいろいろあったけれど来年はいい年になればいいなとねがっています。

(オパーリンの感想)

言文一致という言葉があるが、東町健太氏はまさしく言文一致な男である。会っても、殆ど会っている間中この文章に書かれている様な悪態をついている。彼は正直な男なのである。その分、世間一般にまかり通っている「嘘」に対する感度が非常に高い。

節電、エイズ、人々が世の中で「大変だ大変だ」と騒いでおきながら、誰もそれを「自分たちの日常の延長線上にある問題」としてとらえない、行政の対応もまた然り。彼はそう言った「嘘」に怒っているのである。

エイズの話で言えば、僕と東町氏はこの二年、新宿二丁目で行われているゲイの祭典「レインボー祭り」に参加している。誤解しないでいただきたいのだが、僕も彼もノン気である。そのレインボー祭りでは「風船募金」的な催しをおこなっていて、募金をすると風船をくれる。そこで集まった資金はエイズ対策のために使われる。で、お祭りのクライマックスではみんなでその

風船を空に放るのである。また、祭りの間、通りでは（恐らく）ゲイバーの店員さん達がコンドームを配っている。

ここから何が言いたいのか、というと上手く言えないのだが。僕や東町さんとゲイの人達は関係あるのかといえば、直接の関係はないかもしれない。でも、じゃあ何も知らなくていいのか、といわれればそうでもないんじゃないか。という事が言いたいのである。

彼のように、「嘘」に対して鋭く怒れる人の「視点」を見過ごしてしまうのはもったいない。来月は何に怒ってくれるのか、楽しみに待つ事にする。

（初出 『月刊 オパーリン王国 2011年12月号』）

「生きてても無駄」

先日、いつものようにぬらぬらと仕事をしているときのことだった。仕事はいい感じだった。最低な仕事だけど最高に順調だった。全体的に見て総括するなら微妙だった。完膚なきまでに完全に微妙だった。たとえるなら「40年以内にマグニチュード7クラスの地震が起きる確立は45%」という予報くらいに微妙だった。そんないつも通りの、まるでV6における長野の存在感のように冴えない日にその事件は起きた。

そのときの仕事内容は物を右から左に動かすだけの、脳の溶解をぐんぐん促す素敵な作業。もはやおかゆのようになってしまった脳をタップタプいわせながら「えいやっ」と物を持ち上げた時、首筋にかなりファンタスティックな痛みが走った。全力で走った。結構な重さの物を持ち上げたことで、首の筋というか何かを痛めてしまったのだと思う。「あむでゆううっ！！」わけのわからない叫び声をあげつつ僕はその場で崩れ落ちた。崩落、というよりは崩壊、そんな感じだった。

それからは今に至っても首の痛みと戦う日々が続いている。この痛み、痛めたその日に比べればかなりおさまったものの日常生活にかなりの支障をきたしている。首を動かすと痛いから、後ろから話しかけられたりするとなかなか困る。普通に体ごと後ろを向けばいいのだけど、ついつい首を動かしてしまう。人間だもの。確かに同じ人間だけど相田みつおなんかと一緒にたにまとめられるとなんかむかつくね。そうして首を動かすと、首がまたフレキシブルに痛む。痛みで全身が固まる。あう。

そうして痛む首を抱えながらの仕事、首をもっとも痛まないように変な姿勢で変な体勢をとりつつの仕事。それは僕の腰を無情に破壊した。もともと腰は以前から悪いのだけど、それがより凶悪な感じになった。もうもはや服を着る、ラーメンをたべる、土下座をする、といった日常のことまでかなり困難な状況になっていった。

そうして痛む腰と首を抱えながらの仕事、腰と首をもっとも痛まな以下略、今度はひざにまで激痛が走ってきた。駆け下りてきた。満身創痍プレイの始まりである。

そんな私を救ってくれたのは市販の頭痛薬でした。一日9錠、朝昼晩食後3錠ずつ飲むと不思議と痛みがやわらぐのです。もう私はイブAがないと生きていけません。イブAのおかげで人生が変わりました。ありがとうイブA！

しかしそんな僕の幸せも長くつづかなかった。なんでも頭痛薬は飲みすぎではいけないらしい。というか死ぬらしい。そんな情報入手してしまった。死の恐怖におびえふるえつつ僕は泣く泣く頭痛薬の服用を一日6錠に減らすことにした。知らぬが仏だな。知らなけりゃホントにホトケになってたけれど。

「頭痛薬とウイスキーを一緒に飲むとね、ふわってなっていい感じだよ」

そう高校生当時の僕に教えてくれたT君は信念の人だ。T君とは小学校から大学までずっと同じ学校に通っていて、お互いに気心の知れた仲だ。T君は幼い頃に聞いた「無駄なものなんて世の中にはない。無駄だって思うものこそが人生を豊かにするんだ」という手垢のつきまくって悪臭放つふざけた人生訓に感銘を受けた。そしてT君はより無駄なことを追及し、無駄な人生を歩むことを決めた。そんな無駄な信念を貫く人だった。そんなT君は周囲から当然理解されず、さまざまな迫害を受け痛みをこうむった。結果として奇抜な頭痛薬の服用法をするようになったのだらう。

T君は小学生のとき、お菓子の袋にはいつている「食べてはいけません」「DON'T EAT!」と書いてある袋の中身を食べたらどうなるか、そんな無駄な研究をしたくなった。ただ自分で食べるのは怖かったので、彼の弟にかなり暴力に比重をおいた説得をし、大量に食べさせてみた。弟は二週間ほど入院した。T君の人生はこれで豊かになったかもしれないが、弟くんの人生はその分まずしくなった。

T君の家には一匹の犬がいた。今は残念ながら亡くなってしまったのだが、とても人懐っこくてかわいい犬だった。T君はその犬が初めて家に来たとき、「自分が名前をつける！」と言い、譲らなかつた。彼がその犬につけた名前は「キャット」だった。僕がT君の家に遊びにいくと「ワンワン」と元気よくほえながらキャットは僕を出迎えてくれたものだ。T君は自分の愛犬の人生も無駄なものにしてしまいたかつたのだ。

「真のアブラゼミを造る」と宣言して捕まえてきたアブラゼミにサラダ油に浸していたときもあった。意味はわからなかつたがその行為が無駄であることはよくわかつた。その「真のアブラゼミ」をキャットがつかまえて食べていたりした。

ほかにもバッタとカマキリをセロハンテープでくっつけて新生物「カマツタ」をつくりだしたり、当時小学校の授業で使っていた友達の30センチものさしをヤスリでけずって28センチものさしに改造したりしていた。すべてが無駄な行為だった。

高校生になってT君は一度、タバコをもっていた、と教師に咎められ二週間の停学処分になったことがある。しかしそれは正確ではなかつた。T君がもっていたのはタバコではなく錦糸町まで行って買ってきた合法ドラッグだった。T君は語った。「タバコは20歳未満が吸ったらいけないって法律があるよね。だから高校生がもったらそりゃ停学にもなるだろ。でも20歳未満

は合法ドラッグをキメたらいけないなんて法律はないじゃん。だから俺が停学処分はおかしいと思うんだよね。」もったもな意見だとは思ったが、何かを根本的に間違えている気がした。それをT君に伝えるのはなんかいやだったから何もいわなかった。いろいろ書いたがT君は実は勉強はとてもよくできる人間だった。うそのような本当の話だ。とりわけ数学的な思考回路はすさまじいものがあり、教師に数学オリンピックの出場を打診されていたほどだ。数学の天才は問題を見た途端、まるでパズルのようにその問題の答えがわかってしまいうらしい。T君は「答えはわかるけど、途中式の書き方がよくわかんない」とぼやいていたことがあった。それを聞いてこいつは本当に天才かもしれないと思った。しかしT君は文系コースを迷わず選択した。天才のT君は古文や日本史で赤点をとって補習を受けていた。そんなT君であるが無事大学も卒業し、大手の銀行に就職した。大学時代、いっさい勉強をせず、マリファナばかり吸っていたT君がなぜ就職できたかはわからない。二十歳をすぎて突然ポケモンにはまり、五反田だかどこかのポケモンセンターに通いつめていたT君。そこでヒントを得たのだろう、ピカチュウと幼女が熱くねっとりからみあう新しすぎるジャンルのマンガを書いて同人誌にのっけたりしていたT君。そんな獣・じゃないかポケモン姦マニアの彼でも就職はできたのだ。

そんなT君は先日、銀行を辞めた。銀行には無駄がないかららしい。今T君は障害を持つ子供のために働く職に就きたい、と目標をさだめ勉強にはげんでいるらしい。

T君は語る。

「障害者ってさ、世の中の無駄じゃん。いなくていいじゃん。だってそんなの埋めちゃえばいいわけでしょ？そんな奴らの世話する仕事ってマジで無駄だよ。その無駄な感じがいいの。いなくていい感じがいいの。無駄と無駄があわさってより強固な無駄になるよね。ちなみに俺の目標にしてる人物はね、まあ俺なんかにはなれないけど、前総理やった鳩山だから。あんなに無駄のかたまりみたいなのやっつかなかったよね。本気で尊敬してる。あつ頭痛薬飲む？」

障害者のために働くという彼のやっつてることは素晴らしいと思ったが、彼の理念は激しく間違えているとおもったが、それをT君に伝えるのはなんかすごくいやだった。なんか頭痛薬という単語から変なことを思い出してしまった。体中すでに痛いのに頭まで痛くなってきた。でも10代後半とかの時期に「自分探し」とかやりだして挙句「世の中のために役に立ちたいです」とか言っちゃうやつらも無駄さにおいてT君と変わらないなあとも思う。もう二十歳すぎてるのに自分のことを「～女子」「～男子」とかいつつやうやつらの存在も無駄。そして電子書籍で雑誌とかつくつやうのも無駄。世の中なんでこんなに無駄が多いかなあと首をひねったら激痛で、あう。

(オパーリンの感想)

「たばこほど無駄なものはないけれどもね。無駄のようにみえるものを、どこまで許容し得るか・・・それが文化でしょう」これは池波正太郎の言葉である(『グレート・スモーカー』より)。この社会においては「いかに無駄をなくすか」が非常に重要な命題として我々の頭の中に刷り込まれてる。みんな、無駄をなくすことに「しゃかりき」になっている。みんな。このしゃかりきの努力が実り、もしこの社会に無駄なものが何一つ無くなったら、みんな最適化され、一切の無駄のない究極の人間になる。つまり、みんな同じ一つの形体に至るということである。無駄のない人間、それはみんな同じ顔、同じバストサイズ、同じチンチンの長さ、という事である。

違う部分、共通から外れる部分、そんな所にこそ「僕」であり「貴方」である所以が宿っているのである。だから、人が誰かを愛する時、彼、彼女はその人の「無駄な部分」をこそ愛しているのである。つまり、無駄が無くなれば愛も無くなり、僕と貴方の間には何の違いも無くなる。そんな世界はまっぴらごめんだ。

だからこそ、僕が僕であるために、貴方が貴方であるために、無駄を愛し、無駄な事をしよう。東町氏の文章を読んでそう感じた。

(初出 『月刊 オパーリン王国 2012年1月号』)

寒天撲滅の日

「寒天撲滅の日」

この記事を書いているのは2月16日である。この日は何の日かご存知の方はいるだろうか？この日はなんと！「寒天の日」なのである。だから普段は、「寒天の話はしたくないです。そのことについてはお願いだから触れないでください。もう私たちを放っておいて！」と泣く寒天派の人にも、どんな人であってもこの日ばかりは寒天を貪り食わなければならないのである。いったいこの誰が、いったいどんな権威をもって、いったい誰の許しを得て2月16日を寒天の日などという愚かで何の意味もない日に定めたかは知らないし、もはや知りたくもない。しかし今日は寒天を貪らなければならないのだ。のだのだのだのだ。野田死ねっ！とても残念なことだ。悲しいことだ。

だから私は今日、必死になって寒天を貪った。豚のように。ぶうぶう。山のように皿に盛られた寒天を前に歯を食いしばり、嗚咽号泣しつつ、人の世の不条理を嘆きつつ、「うふふ。むこうでアヒルさんが警察官をばんばん撲殺しているよ。うふふ。」などとにたにたしながらつぶやく半ばアレな人になりつつ貪りましたよ。まるで豚のようにねっ！

が、ふと気づいた。今日は寒天の日と定められているにもかかわらず、僕の周りの愛すべきヒューマンたちは誰ひとり寒天を豚のように貪っていないのである。愛すべきヒューマンのみみんなっ！一体どうしちゃったっていうんだい？！私は訝りながらも彼らを観察してみた。するとなんとたることか、愛すべきヒューマンの馬鹿どもは寒天を貪るところか、ポテトチップス、ほっけの煮付け、スパゲッチーナポリタンなどを放歌高吟、呵呵大笑しながら楽しげにハッピーに召喚し上がっていらっしやいやるのである。寒天などふみにじりながら。ながら。ナイアガラ滝の滝の中は寒天を貪らないのか。虫なのか、やつらは虫なのか？そう思って私は彼らに聞いてみた。「何ゆえお前らは寒天を貪らないのですか？虫なんですか？」しかし彼らは虫ではないと言う。むしろ寒天を泣きながらにちやにちや食っている私のことをみなでディスって笑っていた、と答えたのである。悲しかった。世をはかなんじやった。今日は寒天の日だというのに誰一人として寒天を貪らない。こんなことがまかりとおっているのだろうか？この世に正義はないのだろうか？私は今すぐ消えてなくなりたい。タイヤキ食べたい。

そこで私は悟った。悟ったよ～でへへへ。寒天の日もふくめて「～の日」というものはみんなごみだ。無意味だ。ナンセンスだ。だってみんなそんなの無視してんじやん。こんなことを書くといやキリスト教徒とかガチでクリスマスとかやってるよ。お前馬鹿じやないの？今すぐ二トログリセリンで粉々に爆死したらいいよ」と言われるかもしれないね。でもあいつらだって内心本当にガチかどうかなんてわかったもんじやないし、まあ物には例外ってのがあんじゃないっすかあ～勘弁してくださいよ～って思ってるよっ！はは論破。2ちゃんねるとかで論破って単語使うやつはみんな馬鹿だよ。俺も馬鹿だよイエイ！！

ここで「～の日」に関してひとつ思いついた話をしよう。「～の日」っていうか「～週間」の話なんだけど。まあカテゴリーは一緒だからいいかなあって思ったんです。ついデキゴコ口だったんです。それは私が小学生のころの話だ。「君たちには無限の可能性があるんだよ」とか教師だかだれだかに言われて目をキラキラさせていた小学生の頃の話だ。あのころの自分に今現在の一片の可能性すらもたずに最底辺人生を歩む俺の姿を見せてやりたいぜ。先には絶望だけしかないぜ。みんな俺のことを毛虫のように嫌っているぜ。実際俺はメシ食って寝て死ぬだけのなあ。それが幸せだったかもしれないけどなあ。私の通っていた小学校では、確か9月のおわりごろだったと思うんだけど、近隣のおまわりさんを招聘して交通安全について子供たちに指導してもらおう、という時間をとっていた。9月の終わりには「交通安全週間」があるからである。鉄は熱いうちに打て、という言葉がある。子供のころから交通安全に対しての意識を持たせておけば大人になってから交通安全を遵守するナイスなやつになるんじやねえの？という目的だったのだろう。ちなみに私の同級生でひき逃げ事件を起こして捕まったやつがいるよ。おまわりさんたちさあ、お前らの指導、無駄だったみたいだよっ！その時間に婦警のおばさんが私たちに言った。そのときは自転車の乗り方についてのお話をされていた。私はとても真面目に聞いていた。「あのね、自転車って漢字で書いてごらん。最後に車って漢字がつくでしょ。だから本当は自転車は車道を走らなければいけないの」それを聞いて私は言いましたよ。ちゃんと手を挙げて言いましたよ。「じゃあてめえ今すぐ車道で乳母車乗り回してこいよ。今すぐ乳母車で高速のって120キロで疾走してこいよ。体中に風を感じてこいよ。やれよさっさとやれよ。殺すぞ殺すぞあああああっつ！！！」と半狂乱になって婦警さんに言いました。うん、いい思い出だ。夏が過ぎ風あざむ麗しき私の少年時代。お・も・ひ・で。婦警さんとしては、自転車は本来車道を走んなきゃだけどそれも危ないから歩道で乗るのもしやあないけど歩道を走るのも危ないことだからめっさ注意してねって言いたかったのだろう。車がどうか子供だまし言うから悪いんだな。そう、子供が相手だから子供向けな話になるのはしょうがないけど子供だましはいけないなあ。

「～の日」とかいうのも全部子供だましだね。俺から見たらね。さっきクリスマスって単語

でたけど12月25日にイエスが生まれたなんて聖書のどこにも書いてないし。そもそもそのへんの大工の息子の誕生日なんていちいち記録に残ってないし。「交通安全週間」なんてだめ。ぜんぜんだめ。だめつぶりがすごいよ。あんたチャンピオンだよ。だめ世界に君臨するだめチャンピオン。なんか交通安全週間だとやたら町でおまわりがうろうろしてちよつとした違反とかもガンガンにとりしまってる。ほとんどのいちやもんみたなってる。百歩譲ってまあそれはよしとしよう。それで交通事故がなくなるならめでたい。祭りなみにめでたい。わっしょいわっしょい。でもふと考える。交通安全週間じゃないときに家族を交通事故で失った人はこれを見てどう思うのかなあ。まあ思うだろう。「いっつもやっつけ。」

12月1日はエイズの日。ある方がいっていた。この日が嫌いだと。なんかこの日になると思いき出したように国のなんかの団体が「エイズ撲滅」とか言いつつ街中でコンドーム配るんだそう。これにしても「いっつもやっつけ」って話である。エイズに感染した人にとっては毎日が「エイズの日」なわけである。年に一日だけどうこうやって、それでなんかいいことした、仕事した、みたいになってるやつらが嫌いなのだそう。とてもその気持ちはよくわかる。

阪神淡路大震災から～年たちました、なくなられた方のご冥福をお祈りします、とか言うのも嫌だ。嫌っていうのはまた違うかも。本心からその言葉がでてくるならいいけれど。ていうか本心からそう思っている人は毎日冥福を祈ってるんだけどね。テレビのキャスターとかこの言葉を発して5秒後に「さてさて次のニュースは～」とかほざいて満面の笑みを浮かべながら、事務所のごり押しだけで有名になっただけの何の才能もない馬鹿な女優とか歌手が、社会人として完全に終わってるけど芸能人(笑)として浮き草稼業を恥ずかしげもなくやってますみたいな男とくつついたただの別れただのという、公共電波にのせて発信するのはほとんど犯罪なんじゃないかと思うような下らない事柄を報じたりする。震災のことなんてどうでもいいと思ってるようにしか見えないよね。むかつくよね。

予言、というか断言する。数年後には3月11日も、言葉上でだけ適当に深刻にしゃべってそれで満足しちゃう馬鹿でこの国は溢れる。下手したらすでにあふれてる。深刻ぶって心にもないこと言って体裁を保ってそれでなにか自分をすばらしい人間みたいに錯覚する馬鹿。そんなやつらはもうしゃべるな。もう口を開くな。消えてなくなれ。

さて今日2月16日寒天の日。山のように盛られていた寒天ももうもはやない。ごみにだしちゃったから。心が晴れ晴れとしている。天気は悪いけど。わろしだけど。はは、わろす。最後に書き記しておかねばならない。「～の日」なんて無駄だと声高に主張しているのは別におとといのバレンタインデーでどの女性も誰一人としてチョコレートをくれないばかりか話しかけても一言の返事もしてくれない、という憂き目にあったからではない。ではない。2回も否定してしまうくらいそんなことはない。そもそもおとといに限らずいままで生きてきて経験したバレンタインデーすべてでそんな目にあっているからではない。まあバレンタインもただの子供だましだし無意味なんだけどなっ！何故だかちよつと泣けてきたけどなっ！！

(初出 『月刊 オパーリン王国 2012年2月号』)

「昆虫バンジー」

アフリカのある部族では一定の年齢に達した者は長いひもを腰に巻きつけ、高いがけの上から飛び降りる、いわゆるバンジージャンプのようなことをしなくてはならないらしい。今日本に暮らす私たちがバンジージャンプと聞けば「スリル満点じゃん。いいじゃん」と思うかもしれないがそうではない。これは成人になるための儀式であって、「俺無理っす。マジこわいっす。」などどほざく者はもう成人として認められない。「人と成る」と書いて成人である。成人として認められないものは人未滿、簡単に言えば虫である。このバンジーをクリアできない虫はその部族の中でつまはじきにされ、何か発言しようものなら「虫のくせにうるせえよ」「くせえよ、虫はくせえんだよ」などと言われて殴る蹴るの暴行をくわえられたりする。家に火をつけられたりする。だれしも虫でなく人間になりたいから皆そのバンジーをクリアするために幼きころから精神面を鍛え、鍛錬を積む。その鍛錬の結果として立派に鍛えあがった強靱な精神力をもつことができ、バンジーをクリアしてその者は成人になれるのである。

日本ではどうだろうか。日本では二十歳になった時点で誰であっても成人として認められる。バンジーなんかする必要はない。やっほう！近代国家ニッポン万歳！と喜びたいところだがすこし考えてみたい。本当にいいのだろうか？

自分の周りにいる「成人」の皆さんを思い浮かべてみた。勤務中に仕事そっちのけで私に「勤行はいいよ～勤行したら心がすうってなるよ～」と得体の知れないものを勧めてくるばあさん。「ちょっとチベットいって来る」といいのこしてそのまま消息不明になった友人。大学七年生になっていまだに卒業に必要な単位を取れていない高校のクラスメート。自分で自分の食い扶持も稼いだこともなくせに何故かわかったようなツラをして自信満々に社会を語ってるやつ、就職活動中の学生とかに多いけど。こいつらは本当に「人」に「成って」いると言えぬのだろうか？虫なのではないだろうか？極端な例ばかり挙げたけれども、テレビをつけて国会中継を見ていたりすると、どうも虫にしか見えないような先生方もちらほら見受けられる。しかも総理大臣だったりする。ワイドショーで誰と誰が熱愛中かどうかのこのと嬉々としてしゃべっているのは完全な虫である。もはやハエである。まあそういう私もまた虫だったりするのだけど。このようにどうして成人にはなれていない、すなわち虫である連中が成人面して選挙で投票したりするのである。これはちょっとヤバイんじゃないの？と思う。

じゃあどうすんだよ、という話になるわけだが、そこはやっぱり教育なのかな、と思う。ちゃんと人に成れるよう、虫たちを教育するのだ。それには学校もそうだが、なによりも家庭での教育が大切だと思う。

親の愛は海より深い、みみたいな言葉もある。親としては自分の子供を虫ではなく人にしたいと願うからどうにかして子供に教育を施そうとする。しかし、親による虐待、また親に突然の不幸があったりして、家族とともに暮らせない子供なんかもいると聞く。痛ましいことである。残念なことである。しかし、この日本という国はそんな彼らのために「里親制度」という素晴らしい制度をつくった。すなわち裕福な立場にいる富豪に家族とともに暮らせない子供たちを引き取ってもらい、彼らに家庭での教育を担ってもらおうという制度である。なんて素晴らしい制度だろうか。ナイスなことこのうえない。いろんな新興宗教団体がこの制度をバンバン悪用して、幼い子供たちをガチガチに洗脳しているという事実もあるが、とにかく最高だ！

現実問題、今この社会のかなりの割合を人ではなく虫が占めている。そして虫なので群れたりする。右と左に分かれて群れている。群れからはぐれると何もできないくせに自分だけはいっぱいの人間だと思ってる。そんなしょうもない虫たちの集団の中で、他の虫より優位に立つためだけに足を引っ張り合って貶めあっている。居酒屋なんかで虫同士の会話を聞いているとおもしろい。延々自分たちの所属している群れへの不平不満、群れの中にある弱者へのあざけり、根拠のない虫けらしい噂話、そんなのばかり。自分が虫けらだと気づく、それこそが「人」に「成る」ための第一歩なのに、「自分だけは正しい人間だ」と思い込むバカが多すぎる。自分の「正しさ」を確信した瞬間、過ちが生まれるということがわかってないやつはもう害悪を通り越して哀れだ。例を挙げるとA日新聞に投書とかしてるじいさんは哀れだ。捕鯨船に嫌がらせをするのを生きがいにしてるやつ。「環境保護」だの「人権」だの、綺麗っぽく聞こえるお題目をととなえているけれど実態はただ活動するだけのために活動してるやつ。こんなやつらは無残としか言いようがない。こいつらに言いたい。「虫のくせにうるせえよ」「くせえよ、虫はくせえんだよ。」

(初出 『月刊 オパーリン王国 2012年2月号』)

悪気はなかった

「悪気はなかった」

女の子はどうか知らないが、一般的なイメージとして男の子というものは昆虫が好きだったりする。しかしそれも子供のうちだけで、歳を経るにつれ昆虫に対する興味はうすれ、そればかりか触るのも見るのも嫌になってしまったりするわけだが。かくいう私もそんな男の子であった過去があり、今現在、大がつくほどの虫嫌いであるわけだが少年時代は四六時中アリの巣を水攻めにして壊滅させたり、トンボの頭をむしりとったり、ちいさな虫かごにカマキリとバッタをいれてミクロな惨劇を演出したりして無邪気に笑い遊んでいた。そんな時代、私がもっとも愛情をそそいでいた昆虫はなんといってもカブトムシだった。小学校の低学年のころだったと思うが、夏休みに父の田舎（秋田県です）に家族で帰省した。そこはなぶん田舎であるので山やら森やらが存分に残っており、その山やら森ではいままで図鑑でしかお目にかかることのできなかつたカブトムシ・クワガタの類がそれこそ佃煮にするほどいた。狂喜乱舞してそれらを乱獲した私は、その収穫の一部を虫かごに入れて大切に持ち帰り、日がなうっとりと眺めていたものである。そんな宝物を友達に自慢したくなってくるのはどうしようもないクソガキであった私には当然のことだろう。そのころ一番仲の良かった友達、仮にS君とでもしておくけど、そのS君を電話でもって我が家に呼び出し、自慢のカブトムシを見せびらかした。S君にとってもカブトムシは憧れの存在であり、彼も目をかがやかせていた。しかし、S君は私のようなクズと肝胆相照らす仲になるようなしようなないガキである。Sは、カブトムシを前にしておそらくテンションが上がりすぎて錯乱したのだろう、何か訳のわからないひもでもってカブトムシを縛り、ひもの端をもってそれをぶんぶん振り回すという暴挙にでた。いくら子供にとって最強の存在であるカブトムシといっても所詮虫けらである。振り回されたカブトムシは瞬時にバラバラにちぎれまくり、唾然とする私の前で哀れな醜悪な物体と化した。当然逆上した私は彼に食ってかかり泣きながら責め立てた。Sは言った。本当に申し訳なきような顔で言った。「ごめん…悪気はなかったんだ…」

悪気がないならしょうがないかな、と思った。そして子供はバカなので、非業の死を遂げたカブトムシのことなど即忘れ、楽しくS君と遊んだ。

確か二十歳になったときのことである。その当時私はもってうまれたふざけた精神をもてあまし、かつ誰もが当然のようもっているまともな社会性をもっていないという自らのおかれた状況に絶望しながら世の中を恨んで孤独な学生生活を送っていた。そんな私が何故だか高校時代の同級生の集まりに会い、と誘われた。信じられなかつた。とても嬉しかった。高校時代、まともな友達なんて一人もいなくたたくせにろくな思い出なんか一つもないくせに軽くいじめられていたくせに。一も二もなく、すぐさま参加を申し出た。その集まりの当日、安いネックレスを装着する、髪の毛にワックスを塗りたくってみるなどやたら間違えたおしゃれをして挙句の果てに香水までつけ、午後六時待ち合わせにもかかわらず午前九時には集合場所の最寄り駅に到着、時間まで延々そわそわしていた。

結論からいうとその集まりは最低だった。今考えるとすぐわかるのだが、二十歳くらいの人間が集まって酒など飲むとろくなことにはならない。うるさい、とにかくうるさい。酒はこぼすけんかははじまる奇声を挙げるバカはいるetc。そんな乱痴気騒ぎと一緒にさわげるわけもなく、そもそも三時間あまりのその会においてほぼ誰からも話しかけられず、「あいつ誰？」みたいな声もちらほら聞こえるといった私にとってこれ以上ないほどひどい時間だった。

そんなバカ騒ぎは店、あるいは他の客にしてみたらかなり眉をひそめるものだったのである。何度か店員が注意をしにきた。顔を怒りで歪ませながら。店員は他の誰でもなくまっすぐ私のほうへ向かってきて、客商売の人間とは思えないような暴言を吐き散らかした。何故よりによって私なのか、周りを見渡してすぐにわかった。みんなもう滅茶苦茶になっていて、話の通じるような人間が一人としていなくたのである。結果として集団の中でもっとも静かにおとなしくしていた私のみがぼろくそに怒られ謝り続け、ほとんど暴徒と化して好き勝手やってる奴らは樂しげに「ひゃっほう！」とか言いながらビール一気飲み競争なんかしているのである。目を涙でいっぱいにして謝罪をし続け、空いた皿やビール瓶のかたづけまで手伝わせられていた私を見て近くにいた別グループの人が私に声をかけてきた。

「しょうがないよ。こういう時は一番飲んでないやつが損をするんだよ。店員の態度はむかつくだろうけど、あいつらも悪気はないんだし、騒いでるやつらだって悪気はないんだからさ」

悪気がないならしょうがないかな、と思った。ビールこぼしたやつがいるからテーブルふかなきゃいけないので、あまり深く考える暇はなかつた。

出勤時、私はいつも駅まで15分ほど歩いていっている。自転車はもっていないから徒歩で行くほかはない。以前は自転車を持っていたのだが盗まれてしまった。足立区に今私は住んでいるが、この地区は多少治安が不安な地区で自転車の盗難など日常茶飯事だ。毎日15分歩くというのも疲れる話だがもう慣れているので苦に思うことはない。それに歩いている方が季節の移り変わりなどもより感じ取ることができる気がするし、そんなに悪いことばかりではない。そうや

っていつもどおり歩いて駅へ向かっているときに見た出来事だ。

私のいつも使用している駅の近辺は歩きタバコ禁止区域となっていて、歩きタバコをしている人を注意するために巡回している人たちがいる。あの人たちは区の方で雇われている人たちなのかな？まあそんな疑問はともかく、僕が見たのは歩きタバコをしていたおじさん、というかおじさんといったほうがいような人が、そういう歩きタバコ注意部隊に捕まっていた場面だ。

「すいませんけどこのあたり、歩きタバコ禁止なんで…」

そう声をかけられ、喫煙おじさんはかわいそうなおろおろしながら、本当に申し訳なさそうな表情を浮かべ注意部隊に謝っていた。

「ごめんなさいごめんなさい…。ついついね…。本当に悪気はなかったんだよ、ごめんなさいね。」

彼はそうやって手に持っていた吸いかけのタバコを路上に投げ捨てた。

悪気がないならしょうがないかな、と思った。「歩きタバコ状態」を咎められたから、最速の手段でその歩きタバコ状態を脱しなきゃ！と喫煙おじさんは思ったのだろう。結果的に彼のした行為は「ポイ捨て」というより評判の悪い行為なわけだが。

いろいろ振り返ってみて一つの真理を見つけた気がする。悟った気がする。いける、と思った。これならいける、と思った。これなら今までの苦労も全て報われるはずだ。

要は悪気がなければ何をしてしてもOKなわけだ。はは、見つけたった。

そういう真理を携えて、とりあえずまずは職場に電話してみた。

「あ、もしもし。明日からちょっと5年間休みます。悪気はないんですけど、仕事キライなんで。悪気はないからその間の給料は当然ちゃんと払えよ。」

もう二度とこないでいい、と言われた。悪気はないけどうちの会社は君を必要としてない、と言われた。泣きながら謝った。

「ごめんなさい…こんな電話したけど…悪気はなかったんです」

(初出 『月刊 オパーリン王国 2012年3月号』)

第一回「その「声」は「誰」の声？」

第一回

「その「声」は「誰」の声？」

執筆者 東町健太、オパーリン

・企画趣旨

とある大新聞に日がな寄せられる読者の「声」。その声は一体誰の声なのか？何を代弁しているのか？国民、労働者、女性、弱者、子供、はたまた単に「我々」という曖昧な共同体意識か？気になって読んでみれば、これまたびっくり、とんでもない・・・、いやいや思わず溜息がこぼれるほどのすばらしき投稿ばかり。

ということで我々オパーリン王国では東町健太氏を委員長にすえ、「『その「声」は「誰」の声？』委員会」を結成した。当委員会では毎月、これらの投稿の中から特に秀でた投稿について勝手に表彰し、講評を行うこととする。

・『その「声」は「誰」の声？』委員会 メンバー紹介

選考委員長 東町健太

選考副委員長 オパーリン

・2012年3月度 結果発表

〈大賞〉

「子ども手当ては息子の旅に」

(主婦 女性 48才)

「子ども手当て」が支給される前は、道でホームレスの方を見かけては「果たして私たちが本当に頂いていいか」と悩んでいた主婦です。

中3の息子は国立の一貫校なので、受験料も塾代もかからず、毎朝お弁当作りに励み、勉強している時は後ろから喝を入れ、お金をかけずにやって来ました。

当初、手当はおかず代や貯蓄にと考えていたのですか、主人の「使わないと意味がない」という意見に賛同し、すべて旅費に使うことにしました。昨年、息子は名古屋、大分、沖縄、グアムなどを旅し、心も体も成長したようです。手当は大いに役に立ちました。ただ私としては手当が続くなら子どものためにも、景気回復のためにも街の商品券、図書カードなどにしたほうがいいと思います。

〈講評〉

・東町健太（選考委員長）

見事、の一言につきる。書き出しがまず秀逸だ。ホームレス、という単語が出た時点で例えば私のような凡人であれば福祉関連の話題に入ってしまうだろう。しかし著者の非凡さはそんなありきたりな考え方をしないところにある。「本当に頂いていいか」と悩むならば当然、ホームレス支援団体などに寄付をしたりするのかもしれないと思いきや、まさか「国立の一貫校に通う」恵まれた息子の旅費になるという驚きの展開。「その日食べるパンをゴミ箱から拾うホームレス」と「名古屋で揚げたてのエビフライに舌鼓を打つ若者」、「都会の雑踏の中で必死に生きるホームレスと大分の豊かな自然を満喫する若者」、「長い路上生活で真っ黒に汚れてしまったホームレスとグアムや沖縄の美しい海で真っ黒に日焼けする若者」、このような対比をいやでも読者は連想させられるだろう。こんなに短い文章で現代社会の貧富の格差を鮮やかに描写した筆者の才能は本物だ。

そして素晴らしいのは「商品券」、「図書カード」といった一見なげやりにも見える結論部分だ。この結論の効果で最初に提示されたホームレスの姿は跡形もなく消えうせる。筆者は、ホームレスや社会的弱者のことなんて口では奇麗事を言っても結局はポーズだけで真実は誰も彼らのことになど関心を払っていない、という現代を生きる人々の欺瞞を、その文体をもってしてするどく批判しているのだ。

天才、と呼ばざるをえない才能との出会いに私は感激している。芥川賞受賞に値する。

・オパーリン（選考副委員長）

「人は何故文章を書くのか」について、一読してその認識を根底から覆される思いがした。「筆者は何が伝えたかったのだろうか」という読み手の安易な理解を激しく拒絶する筆者の姿勢に作家としてのプライドを感じる。

見栄、嘘、欺瞞、社会矛盾、偽善、虚無。たった300字あまりのこの掌編には、人間を人間たらしめるありとあらゆる要素が織り込まれている。星新一以来の圧倒的な才能の登場に心からの賛辞を送りたい。

〈佳作〉

「話し合い解散は裏切り行為だ」

(主婦 女性 48才)

本紙をはじめ、報道各社は先月末に野田佳彦首相と谷垣禎一自民党総裁が極秘会談し、「話し合い解散」についても意見交換した模様だと報じている。事実であれば非常にショックだ。

前回の衆院選では自民党に嫌気がさし、民主党に期待して投票した国民は多い。ところが政権交代後の現政権はマニフェストを次々に破っていたずらに国民負担を増やし、逆にマニフェストにはない消費税増税を持ち出した。このような不誠実さへの国民の批判が参院選でねじれを生じさせ、現内閣の支持率も30%を切るところまで落ちた。

だが自民党にも国民の支持は集まっていない。同じ消費税増税路線をとる一方で評価できるような政策は何も掲げず、党自体の改革も進んでいないためだろう。この上、「話し合い解散」などするならば、両党共に国民無視の裏切り行為であり、絶対に許せない。

ますます国民の政治不信は強まるに違いない。

〈講評〉

・東町健太（選考委員長）

「人それぞれ」という言葉がある。私の嫌いな言葉の一つであるが、筆者は私以上にその言葉を嫌っているのだと思われる。この文章の中には「国民」という単語が都合6回もでてくる。「国民」を主語にして持論を語る筆者の文章は「私の意見は国民の意見。私と違う意見をもつ国民なんかいるわけがない！」という力強さにあふれている。前回の衆院選でも自民党に期待して投票した人もいるだろうし、参院選において民主党に期待の一票を投じた人もいるだろうが、そんな人の存在など無視するという非常にたくましい論調だ。「評価できるような政策は何も掲げず」という箇所があるが、もちろんこの箇所の主語は筆者の中にのみ存在している「国民」に違いない。筆者はただの一介の主婦ではない。さまざまな考えをもつ、一億を超える日本国民の全ての声を代表するスペシャルな一介の主婦なのだ。

このような思考回路は一朝一夕にできあがるものではない。おそらく筆者は普段から、例えば自分の乗った電車の暖房が暑ければ駅員に「暖房暑すぎるわよ！国民は怒っているわ！」と怒り、隣家の飼い犬の鳴き声がうるさければ「おたくの犬は国民の敵よっ！！」と怒鳴り込むなどの努力を続けているにちがいない。その努力に敬意を表して佳作とさせていただいた。

・オパーリン（選考副委員長）

筆者は類まれなる隠喩の使い手である。「ひょっとするとこの愚劣極まりない主張は、筆者の本音なんじゃないか」と見紛う程に見事な隠喩である。とりあえず文句しか言わないゴミ、そのくせ「対案」を何一つ提示することなく「そんなものはあんた等が考えなさいよ、当然でしょ。私たち「国民」の血税で飯食ってんだから。」と言わんばかりのふてぶてしいゴミ。徹底してそんなゴミになりきること、筆者は「民意」や「国民」という顔の無い主語を傘にしてものを言うことの愚かさを強烈に皮肉っている。筆者には今後も、その卓越した技巧にさらなる磨きをかけてもらいたい。ただ、できれば、読者が隠喩だと気付くことができる程度にヒントをいただけたらと思う。

〈佳作〉

「若者よ、現状に満足せず怒れ」
(無職 男性 65才)

内閣府の国民生活に関する世論調査によると、2010年時点で20代の男性の66%、女性の75%が「現在の生活に満足」と感じているという。この調査結果を取り上げたテレビ番組で、年配の女性会社社長が、自分たちの若い頃は女性にとっていかに厳しく難儀な社会であったか、また、日本人がみな、よりよい暮らしを求めていかに働いてきたか、を指摘し、現状に満足する若者たちを理解できないと話していた。同感だ。

物質的に豊かな社会で育ったいまの若者にすれば、生きていくのに不自由はないし、政治や社会に関心を持たないために不満も感じないのだろう。40年前、20代の私たちサラリーマンは、低賃金長時間労働反対を叫び、週休2日や賃上げ、その他待遇改善を自ら勝ち取ってきた。同時に弱者切り捨ての政治や政治家の汚職、公害問題などにも怒りの声をあげてきた。それを支えたのは「現状を変えたい」「今日より明日の暮らしをよりよくしたい」という夢と希望だった。労組もストライキも知らぬ若者に伝えたい。社会の不正、国の不誠実、企業の不実、そんなことに常に目を向け「怒れ」と。

〈講評〉

・東町健太（選考委員長）

筆者は65歳である。その年代の方々がこの文章にあるような苦勞をなさって今日の日本がある。現在の日本を作り上げたのは彼らであるといってもいいだろう。しかし現在の日本の若者の状況に筆者は憂いを感じ、「理解できない」と語る。

しかし「理解できない」なりに現代の若者を分析しようとする姿勢には感服させられる。いまの若者は「生きていくのに不自由はな」く、「政治や社会に関心を持たない」と「理解できない」はずの若者について言及し、「労組もストライキも知らない」と断定するその姿勢。私のような下賤の者の目でまわりを見ると、何の不自由もなく生きて、政治や社会に関心がなく、労組もストライキも知らない若者など見たことはないのだが、筆者のような現代の日本の土台を築き上げた立派な方の慧眼にはそうは映らないらしい。

ブータンという国がある。この国は国民の97%が「いまの生活が幸せ」と答えるふざけた国らしい。筆者はこのような国へ行き、その幸せな国民に労組やストライキを教え、「怒れ」と伝えてほしい。ブータンを、国民の97%が「今の生活が不満」と答え、頻発するストライキで国民生活が崩壊し、誰も彼もが常に怒っている、そんなすばらしい国に生まれかわらせてほしいものだ。

・オパーリン（選考副委員長）

論理の飛躍、主張の偏り、そんな批判を微塵も恐れぬ描写の筆圧から筆者の覚悟がビンビンと伝わってきた。過ちや批判を恐れるあまりに無難なことしか言えなくなってしまう軟弱な現代の若者への「叱咤激励」は、これまで「労働者の代表」として怒り狂ってこられた筆者の人生がその文章から滲み出ることによって迫力、説得力を増している。ただ、若者全員が現状に満足しているわけではないこと、過去の人とその現状を「よりよく」した結果が2012年の日本の惨状、あ、いや現状なのであるということだけは言い添えておきたい。

（初出 『月刊 オパーリン王国 2012年3月号』）

第二回「その「声」は「誰」の声？」

第二回

「その「声」は「誰」の声？」

執筆者 東町健太、オパーリン

・2012年4月度 結果発表

〈大賞〉

「駅ナカ保育園、人気というが」
(保育士 女性 48才)

駅ナカ保育園が増えているという。子育て世代には便利で人気も高く、鉄道会社にとっても沿線住民へのサービスとして重要とか。

わざわざ駅から遠い保育園に送り迎えするなんて時間の無駄。保育時間だってなるべく短い方がよい。鉄道会社だって駅利用者の確保にもなるし、ありきたりのテナントよりきっとイメージもいだろう。お互いの利益が一致している。

でも、何か引っ掛かる。子どもはそれでいいのかな？

人が行き来する駅って落ち着かないんじゃないかな？近くに公園はあるのかな？太陽にあたり土や水に触れられるのかな？子どもの成長過程において無駄だと思えることが、後から影響が表れたり、大事な意味を持ったりするような気がする。あまり大人の都合で考えないでほしい。

でもそんなこと言っても好環境の保育園はなかなか入れないし、共働きしないと生活できない。大人にきつと余裕がないんだね。

〈講評〉

・東町健太(選考委員長)

この文章を読み終えてずいぶん長い間、溢れる涙を止めることができなかった。人の心に潜む悪や醜さを全て受け入れ、そして全てを許す。イエス・キリストはこんな人だったのではないかと思う。

筆者は誰かを批判するようなことはしない。まるで自らが思い、感じたかのように文書をつづる。自らが裁かれることによって他者の罪をあがなおうとする姿勢はまさにキリストだ。

限られた時間の中でそれでも子どもを保育園に通わせようとする親心。それに協力しようとする鉄道会社。その関係を「お互いの利益」と斬って捨てる冷酷さ。

「人が行き来する」「落ち着かない」保育園で「近くに公園」がなく「太陽にあたり土や水に触れ」られない環境で育った子どもの将来は暗いとでも言いたげな論調。差別にすらつながりかねない思考回路。それをあたかも子どもの立場にたっているかのようにみせかける卑怯さ。

まさしく全て「余裕のない」大人の考えだ。しかし筆者は誰かを批判するのではなく、自らを醜く描くことによって、密かにそのような考えを持つ者を悔い改めさせようとしているのだ。なんという愛に満ちた方なのだろうか。当然、大賞に選ばせていただく。

・オパーリン(選考副委員長)

最後の一段落、そこに集約されていると思う。普段母親たちがよく口にする「子供のために」という言葉の虚妄を見事に引っぺがしてくれている。「要するにテメエの都合だろうが！」と言いたいのだろうに、そこをグツと堪え、やさしい口調で「余裕がないんだね」と、あくまでも自発的に気づいてくれるのを待っている。気づく筈もない母親達だからこそそうってしまったのだということを百も承知で。

〈佳作〉

「自宅で楽しくそろばん3級に」
(小学生 女性 11才)

私は自宅でそろばんを楽しく練習しています。お母さんに勧められて、8歳で10級の教本から始め、今では3級になりました。

3級の試験は先月ありました。一ヶ月くらい前から毎日30分くらい練習し、そろばん塾に通っている子どもたちと一緒に受けました。結果は一発合格。塾に通ったことのない私が3級だなんて、信じられないほどうれしかったです。

私はスイミングや英会話の教室、学習塾にも通っていません。でもクロールは25メートル泳げるし、英語も学校の授業でいくらかはしゃべれます。だから、習い事に行かなくてもできるようになることはたくさんあると思っています。

たくさん習い事に通っている友達もいますが、あまり楽しそうではありません。いやいや通っていると聞いたこともあります。

習い事は楽しんでやるものだと思います。私は毎日10分、そろばん2級と暗算の教本で楽しく練習しています。もっと上達したいです。

〈講評〉

・東町健太(選考委員長)

小学生にしてこれほどしっかりした文章を書くというのは驚きだ。まず基本がしっかりしている。二つの意見や考え方を対比させて検証する際、まず一方のいい面ばかり取り上げ、次に他方の悪い面ばかりを強調するというのはアジテーションの基本である。そのあたりが非常にしっかりしている。

塾や習い事に行かなくてもいろいろなことができる自分がいる一方、友達はいいやや塾や習い事に通っている。おそらくはそろばん塾に通っている子どもの中で3級の試験に落ちてしまった子もいるだろうし、スイミングに通っているにもかかわらず25メートルも泳げない子だっているかもしれない。スイミングにもそろばん塾にも通っていない筆者が彼らを見たときの優越感、爽快感というのは想像に難くない。このような文章を読めば誰だって習い事の無意味さ、滑稽さを悟るにちがいない。

ちなみに私事だが、私も小学生のときそろばん塾に通っていた。自分が日に日に上達していくのがうれしく、とても楽しかった記憶がある。

・オパーリン（選考副委員長）

「才能ない奴が幾ら金使っても無駄。」この誰もおおびらには言わないが厳然たる事実を、11歳の少女が言ってくれた。成金の虚しさを斬る模範的なブルジョワ批判、「小さな活動家」の誕生である。人生は短い。自分の正しさだけが正しさではないかもしれない、などという自家撞着は全くもって無駄なことである、と私もこの頃に気づいていればと悔やまれる。

猛烈活動家の輝く未来に心からの賛辞を送る。

<佳作>

「政治家の家」へ行ってほしい

（中学生 女性 14才）

3月31日夕刊の「政治家の皆さん、福島を感じられますか？」を読んだ。山梨県の現代美術家の男性が、福島県南相馬市の警戒区域の少し外側に政治家専用の休憩所「政治家の家」をつくり、国会議員約100人に招待状を郵送したが、まあ返事はないという。

私は昨年一月、ニュージーランドを旅行した。最も印象に残ったのはクライストチャーチ大聖堂だ。しかし帰国後、現地で地震が発生。損傷した大聖堂は解体されると聞き、悲しい気持ちになった。再建する時がくれば貢献したいと思う。

ニュージーランド地震はもう世界的なニュースではないかもしれない。しかし、旅行で訪れ、住む人々や美しい街の景観を知る私にとって、ニュージーランドは忘れられない国となった。

政治家の皆さんは「政治家の家」へ行ってほしい。そうすれば被災地への特別な思いが生まれ、被災者の皆さんの気持ちに寄り添った仕事ができるはずだから。

<講評>

・東町健太（選考委員長）

少女の「政治家の皆さん」への厚い信頼感にほのぼのとさせられる文章である。筆者は「政治家の皆さん」が「政治家の家」へ行きさえすれば、「被災地への特別な思いが生まれ、被災者の皆さんの気持ちに寄り添うことができる」と心から信じているのがわかる。筆者本人は地震にあったニュージーランドにおいて最も印象に残っているのは現地の人々についてではなく「クライストチャーチ大聖堂」、つまりただの建物だといいきり、またどのように「被災者の皆さんの気持ち」に寄り添っているかという「悲しい気持ちになった」「再建する時がくれば貢献したいと思う」程度にしか寄り添うことができている。というかこれはほぼ寄り添っていない。このように、「被災者の皆さん」の気持ちにいっさい寄り添うことのできない自分を自虐的ともとれるような筆致で描きながら、それでも「政治家の皆さん」ならきつと、きつと寄り添うことができると筆者は語る。

人を信じる。その素晴らしさを筆者の文章を読んで再認識させられた。筆者の純粋な主張に心が洗われた気さえする。筆者のひたむきな姿勢への賛辞を込めて、佳作とさせていただきます。

・オパーリン（選考副委員長）

現代の『青春の蹉跎』だ。「政治家の家」に言っても何も感じないでいることのできる人間こそが、この日本においては政治家の資質があるとみなされているのだ。それではいけない、と誰もが分かっているながらも、そんなことがまかり通ってしまっている。

筆者は近い将来、その事実打ちのめされることになるかもしれない。その時、ただただ無垢であった筆者がどのように昇華するのか、私はそれに期待して本作を佳作に推した。

（初出 『月刊 オパーリン王国 2012年4月号』）

があるのに乗降口付近で動かないやつ。などなど。

なんでこんなことになっているかというところはみんな内心自分のことだけしか考えていないのであり、他人がどうあれ自分のみがよければいいと考えているからである。まあそう考えるのはいいとしてもそれを具体的に行動に移してしまっている他人へのムカつきを発散させてしまっているからである。そうやってムカつきを発散している人間にたいして、「ちよつと俺邪魔になっただけだからどかなきゃな。」などと気を遣うなんてことをするのはやはりむかつくので「俺、死んでもどかねえ」みたいなことになってしまつて、またその周囲がムカついて、というムカつきの連鎖が始まりこんな体たらくになつてしまつていゝ。だから奥の方のスペース的には余裕があつてもなんかギョギョ、などというわけのわからない事態が起こつたり、電車で恥ずかしげもなく怒鳴りあい始めるおじさま方なども現れたりする。失笑。そいつらが冴えなければ冴えないほど笑える。これを解消するにはまあ一人一人の心、というかマナーの意識しかないわけだけれどもなかなか解消されないのが現実である。

電車内のマナーということになると携帯電話の使用はひどい。なんでも携帯電話の発する電磁波的なものが心臓にマシーンをどうにかしている人にとっては危険らしい。詳しいことは俺は一切知らんけど。だから鉄道会社各社も「すんませんけども、優先席らへんで携帯電話をつこうたりするんは正味な話、やめてつかあさい」などとアナウンスしたりはするが誰も彼もそんなのは、「はは、なんか言つてるぜ、おもしろ」などと言つてこれをシカト、メールをうちまくる、「電車なう」などとつぶやくといった横暴を働いている。もし付近に心臓マシーンの人がいれば「ぐうっ」とか言つて即死するかもしれないにもかかわらずみな楽しげに携帯をいじくりまわしハッピーを謳歌しているのだ。なんたるふざけたことだろうか。ダメじゃんか。

そうやって多くの人々はギョギョな電車でむかつきながら、上野公園かなんかでギョギョな花見をして、よりむかつき、そしてふたたびギョギョな電車にのつてむかつきながら帰る。このつながりはもはや「ムカつき」などというひとことで表すこともできないような深みをおびていて、なかなか深遠なのだけれど、これを解消するには一つしか手段はないと思う。それは何か。簡単なことだ。一人一人が人を思いやる気持ちをもつ。たつたこれだけだ。去年よく聞いた言葉を使うなら、「絆」だ。こんな小学校で教えられたようなことを、しかもテレビやなんかで声高に叫んでいたようなこと、そしてさんざん手垢のつきまくつた言葉であるのに、実践してようなら方があまりおられないように僕が目につく奇妙奇天烈不可思議。

口で言うなら実践しろよ。口先だけ綺麗事言つて体裁整えてごまかして生きてんじゃねえよ。嘘ついてんじゃねえよ。汚くてもいいから真実だけ言えよ。な～んて思つちやうわよ、とオネエ言葉でブツブツ言いつつ窓から見える桜をみたら、やっばし綺麗でいい感じで、私つたらとつてもとつてもご機嫌なのよ、おほほほほ。

(初出 『月刊 オパーリン王国 2012年4月号』)

「あとがき」

大学生活最後の思い出に退学届けを出したのは二十歳になってすぐのころだった。学歴なんかに頼らなくても立派な人間になってやる、と熱い決心をしていた。

今思うとただの馬鹿でしかないし、というか当時も馬鹿だなあとはうすうす思っていた。でも辞めた。何故か。いろいろあるが簡単に言えば単にだるかったからだと思う。思う、というのは僕は馬鹿すぎて自分が何を考えて何をしているのかすらわからなくなることが多くて、その当時間も自分が何を思っていたのか自分でもよくわからないのだ。何も考えてなかっただけかもしれない。で、大学を辞めて勤めにでも言ったのかというと、それは違う。というのも勤める、働く、という行為は結構疲れるし、努力とか勉強も必要になる。それはそれでだるいわけで、だるいのが嫌で大学を辞めたのにまただるいことをしたら、それは意味ないな、と思ったからだ。何もしたくなかった。しかし何もしない、というのも暇すぎてだるくなる。人は何かをしていないとやっぱりだるいのだ。だからあんまりだるくないことをしていた。具体的にいうならドラクエをしていた。三ヶ月ほど、部屋にこもってドラクエをしていた。だるくなかった。というか楽しかった。いい感じだった。

ドラクエの主人公のレベルはどんどん上がっていった。向かうところ敵なしだった。最強。まさに世界最強だった。そしてなおかつ富豪だった。金が有り余っていた。三ヶ月ドラクエしかしていなかったのだから当たり前の話だが。

しかしあるときふと気づいた。主人公の勇者のレベルがひとつあがるごとに自分のレベルがひとつさがっていることに。ドラクエの勇者もそうだが人はいろいろ経験をしないとレベルがあがらない。スライムとか惨殺したりしてね。自分もなにかドラクエ以外の経験もつまなきやいけない、と悟った。僕はスライムを虐殺しないといけない、と悟った。ここまでしないと僕はそんなことすら悟れないのだろうか。

ということで今はさまざまなスライムを殺害して経験をつんでいる。だるいけれども僕は富豪になりたいし、世界最強になりたい。だから頑張る。

そのスライム殺害の一環として書いた文章を本にまとめてくれた奇蹟な方がいた。彼もかなり残念な人だ。ともあれそんなわけでこの本ができました。とてもいやな本です。とりあえず、この本をつくってくれた残念な人には感謝をしたい。

筆者プロフィール

筆者プロフィール

東町健太

たぶん1987年生まれ(25歳)。僕(以降、オパ)が4月生まれであるのに対して、彼は3月生まれなので学年は2つ上である。オパが記事に添えてプロフィールを書いてくれと頼んだところ「お前が適当に書いといてくれ」と断られたので、オパが知りうる限りの事を書いていきます。

大学(文学部?)を中退後、ブラックな印刷会社で働くなど、身体を張った「文学」を行っている。

オパとはかれこれ3、4年の付き合いになるだろうか。オパに文学と風俗のイロハを教える。オパが東京に帰省する度に会い、一緒に東京の町を散策する。

現在は週刊漫画を印刷している工場で単調かつ過酷な労働を強いられている。本人いわく「脳が溶ける」そうだ。最近では昇進し、色々やる様になってきたそうです。

東町健太エッセイ集1 『バカが吼える!』

<http://p.booklog.jp/book/50637>

著者：オパーリン

著者プロフィール：<http://p.booklog.jp/users/opaarinn/profile>

感想はこちらのコメントへ

<http://p.booklog.jp/book/50637>

ブックログ本棚へ入れる

<http://booklog.jp/item/3/50637>

電子書籍プラットフォーム：ブックログのパー (<http://p.booklog.jp/>)

運営会社：株式会社paperboy&co.